石橋

特別
チ12
3643
13 (7)

八

石橋

ワキ 是は大江の定基といひし寂照法師にて候我入唐渡天し彼方此方をおがみめぐり只今清涼山に参りて候是に見えたるが石橋にて有げに候暫く人を待ちて委しく尋ね此橋をわたらばやとおもひ候

シテ 一セイ 松風の花を薪に吹そへて

故梅若誠太郎氏
昭和四年十月廿日
梅若重戸氏寄贈
図書

山路に
わく雲をもさそふ山路の
日暮る樵歌牧笛の声人間万事様々
の世をわたりゆく身の有様物ごとにさゝへ
ぎる眼の前光の陰をやおくるらん
陽かに山岸を遠く来て雲又他に立て
入るかと見て白雲のかゝる谷の戸をと雨
この身をまかせ松吹風やさらに捨つ

て半日の客たりしも今ぞ知るらん
暮らすらく ワキ問 いかにこれなる山人に尋
ぬべき事の候 シテ問 何事を仰せ候ぞ
甲 是成ハ聞及ぶ石橋にて候か シテ さん候
これ社石橋よ向ひは文殊の浄
土なり能々御拝み候へ 甲 扨ハ
石橋にて候ひけるぞや去らば身命

を法力にまかせて此橋を渡らばやと思
ひ候　シテ　暫く候そのかみ名を得給ひし
高僧達も難行苦行捨身の行にて
爰に月日を送りてこそ橋をば
渡り給ひしか。　獅子は小虫をくはんとて
も先勢ひをなすとこそ聞けわが
法力のあればとて行事かたき石の橋

をたやすく思ひ渡らんや言あやう
しの御事や　ワキ　謂ておほかる鍛やらず
尋常の行人は左右なふ渡らぬ橋よ
るに　シテ　向ひ河の深さも此瀧波の雲より落
て数千丈瀧つぼまでは霧こめて身
の毛もよだつ谷の深さ　ワキ　巌峨々たる
岩石に　シテ　わづかにかゝれる石の橋　ワキ　苔路

おりて見えたまはず　渺々として月
をこれ寄る心ぞや　その余のわるゝいし
の橋ゞしまいけ　踏えぞよ橋をゆきかふ
おぬとかめいば此橋の踏みそいと見えたり
まだ下は泥梨をきゝ波の虚空に
もうれごゝろくもあやうしや見るに心も
きえくと此かゝる所のあぶなき行人は思

クリカカケ
草

ひとしらぬ所ぞ　猶く橋の謂委しく
物語り候へ　それ天地開闢のこのかた雨露を
降して国土を渡る是則ち天の浮
橋ともいへり　其外国土世界に橋
の名所さまざまにして水波の難
をのがれ万民富める世を渡るも
橋の徳とかや　然るに此石橋と申すは人

間乃渡せる橋にあらずおのれと出現
して續ける石乃橋なれば石橋と名
を名付たり其面ハわづかに尺よりハせば
うして苔ハなはだ滑らかなり其長さ三丈
余谷のそくばく深き事千丈余りにお
よべり上ハ瀧乃糸雲より懸りて
下ハ泥梨も白浪乃音ハ嵐にひゞ

き合ひて山河震動し雨土くれをうご
かせり橋の景色を見わたせば雲に聳ゆ
る外山乃夕暮に花を咲かせるか夕陽乃雨の後よ
なされ渡る虹をひらくかげら吉
つは祭して谷を見おろせば膽もきえ
すぜもなり人の自らは神変仏力に
あらずは誰か此橋を渡るべき向ふは文殊の

浄土にも常に聖衆の花降りて見せ給ふちや
くきしく夕日のやうにおもしろき目前の
奇瑞あらたなり暫く待たせ給へや影
向の時節も今幾程によも過ぎじ

上拍

獅子とらての舞楽のみぎん牡丹の
英匂ひ満ち〳〵大きむしやうの
頭うてやはやせや牡丹芳牡丹芳

金ずい顕はれて花に戯れ枝に臥し
まろびげにも上なき獅子王の勢ひ
靡かぬ草木もなき時なれや万歳千
秋と舞ひ納め萬歳千秋と舞ひ納めて
獅子の座にこそ直りけれ

残り多